

2022年2月13日（日）

宣教 「何か見えるか」

聖書：マルコによる福音書8章22節～26節

◆ベトサイダで盲人をいやす

22:一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。

23:イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。

24:すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のように、歩いているのが分かります。」

25:そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。

26:イエスは、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。

おはようございます。

わたしは 20 歳の頃大阪の教会で洗礼を受けました。その時から聖書を読んで来ましたが、今日の聖書箇所は、とても心に残った忘れられない個所の一つです。

新共同訳聖書の小見出しには「◆ベトサイダで盲人をいやす」とつけられています

イエスさまは食べ物を求める 4 千人の人々に食事を備え、ガリラヤ湖を渡る舟の中で愛する弟子たちにそのことの意味を教えられました。約 2000 年前当時の、ユダヤ教の宗教的指導者ファリサイ派の人々は、イエスに「天からのしるし」を求め議論を仕掛けていました。弟子たちもその渦中にいたようです。

イエスの言葉と行いそのものが、愛なる神さまの存在のしるしであることをまだ弟子たちは認めておらず、ましてファリサイ派の人々はイエスに対する反感を募らせていったようです。

主イエスこそが、神の子キリストであり、愛といのちと希望のしるしであることは、イエスの十字架の死とよみがえりの後に、弟子たちに分かったことでした。「認識は遅れてやって来る」との趣旨のことばを昔、書物で読んだことがあります。時がたって初めて分かることということが人間にはあるようです。ですから何ごとも今、分からなくても焦ることはなく、あきらめずに神さまに祈り、求め続けることこそ大切なのだと思います。

知っているようだけれど知らないこと、知っているようだけれど本当のことを見えていないということはどんな人にもあることなのだと思います。

今日の聖書個所の「盲人のいやし」は、「見えるということ」について考えさせられます。

イエスは、ガリラヤ地方を巡回して神さまの愛を言葉と行い、特にこの時期はいやしの業を通して、天と地を創られた神さまを伝えられました。そしてイエスさまと弟子たちはベトサイダの町、村にやって来たのです。

22: 一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。

ベトサイダの村はガリアや湖の北にあります。

村の人々が一人の盲人、目の見えない人を、イエスの所につれて来ました。

いやしを行われるイエスのことはもうかなり評判になっていたようです。

村の人々の中には、目の見えない盲人のことを親身に思っていた人々もいれば、イエスの行われるいやしの奇跡を一目見たいものだと興味本位の人々もいたことと思います。そのような人は、一人の人間としての目の見えない人のことよりも、奇跡を行われることの方に心の目を奪われていたのではないかと思います。

イエスは、人間の村人の心、人間の深みにある思いを知っておられ見ぬいておられたかのように、イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出します。

イエスのいやしの働きは、いつも一対一で行われました。「盲人の手を取って、イエスさまは、ご自身の心と体を肉眼の目の見えない状態にあるこの人に寄り添わせます。「手を取る」、その人の歩んで来た人生の歩み、喜び苦しみや悩みをご自身の中に受け入れられたのではないのでしょうか。わたしは、今もよみがえられたイエスさまが、肉眼の目には見えなくても共にいてくださると信じ、信じたいと願っていますが、「手を取る」とは、「共にいる」「わたしはあなたと共にいますよ。」というしるしではないかと思うのです。そして「村の外に連れ出します。」一度、連れて来た人々から離されるのです。その人と一対一になること、そのことがこの人が新たに生まれ変わるために必要だったからです。愛は常識を超えることがありますし、愛は人との一定の距離をとることも忘れません。

わたしたちにも、人間、時には近づくだけではなく、離れることの必要な時はあるのではないのでしょうか。人は目の前にあるものからしばし離れて、神さまとイエスさまの前で、自分自身を振り返る時がどうしても必要なのです。それが、また新しい歩みへの再出発、リスタートの時となるのです。

主イエスのこの人を新たな歩みに向かわせるための行いがここから始まって

行きました。二人きりになり、主イエスは、その人の目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになったのです。

唾をつけていやすことは、約2000年前のイスラエルの地で行われていた民間療法だったようです。他の聖書の個所でもイエスは行っておられます。イエスは、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになったのです。イエスさまは、自分をいやす人に、救いを求める者に必ず言葉を持って呼びかけられます。あの取税人ザカイを思い出します。いちじく桑の木に登ってイエスを通るのを木の上で見ていたザアカイに「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」と呼びかけられました。そしてザカイの家に泊まり、嫌われ者だったザアカイが救われたのです。ザアカイは新しい人生を歩み出したのです。

「何か見えるか」というイエスさまの問いかけに、盲人は見えるようになって来て、「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが分かります。」と答えています。目の見えなかった人は、見えるようにはなってきたのですが、まだ完全に見える状態ではない、人がいることは分かる、木のように見える、歩いていることは分かるという状態だったようです。

わたしは、この場面を通して、人はただちにイエスによって救われたことを体験することもある、まだ完全に見えるとは言いきれない、むしろ多くの場合、人が救われることは、その人がイエスに従う人生のあゆみの中で、時に人生全体を通してその人の上に起こっていくことではないだろうかと思うのです。救いとは、神の愛をわたしたちの人生全体を通して実現する神さから与えられた現実だと思うのです。そこには、無くなることのないまことの愛と、失われることのない希望、もうぐらつかない信仰、そして主イエスの人生と十字架の苦しみ、そして復活を通して神さまからわたしたちに約束されている永遠のいのちの希望があるのです。弟子たちや信仰者には、愛なる神さまとイエス・キリストを土台とする生き方が始まるのです。イエスがよみがえられ、弟子たちに現れ、天に昇られる最期に愛する弟子たちに「わたしは世の終わりまで、いつまでもあなたがたと共にいる。」との希望と約束のことばを与えました。

この言葉は、今日もわたしたち一人一人にも確かに与えられていることを信じます。キリスト者は、日常生活の中でイエスの福音に包まれ、愛を行うことを主イエスから与えられた、また託された使命としてこの世を生きるのです。生きる力は神ご自身が必ず与えてくださるのです。

25:そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。何度でもイエスは手を添えてくださるのです。ありがたいことです。

ついに、イエスに出会ったこの人は、いやされ、再出発の人生を送ることとなったのです。この世におけるイエスと共なる生き直し人生、復活が起こっているのだと思います。このことは私たち一人一人にも起こって行くことなのです。

最後に 26:イエスは、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。この人の家は村の中にあつたと思われるのですが、「この村に入ってはいけない」。この言葉は一見矛盾しているようにも思えますが、意味深長なことばだと思います。

この言葉は、いやされた人が村中を歩き回って、イエスにいやされたことをやたらと言いつらさないようにとの忠告なのかもしれません。これはマルコ福音書に良く出て来るイエスさまの特徴の一つです。と同時に、この人のこれからの生き方をも思います。この村との距離をとって生きる。

「和して同ぜず」との言葉を思い出します。神とイエスを信じる人々は、いたずらに人や集団、社会や世界を忌み嫌うのではなく、また同調するのでもなく、支配するのでもなく、ある一定の距離をとって生きることが必要だと思うのです。家族関係の中、地域や教会の人間関係の中でもあえはまることではないかと思います。肉眼の目には見えなくても、今も存在しておられるイエス・キリストを人間関係の間にはさむということです。わたしたち生涯にわたり、心の目を神さまとイエスさに向けて生きて行きましょう。そこには困難の中でも平安があるのです。

主の平安をお祈りいたします。